



在日米海軍 NOW!

Issue 4

May 2021



空母ロナルド・レーガン トモダチ作戦10周年を振り返る

ジリアン・グレイディ3等兵曹 空母ロナルド・レーガン

2011年3月11日、アメリカの同盟国である日本で、マグニチュード9.1の史上4番目となる大地震が発生し、高さ133フィート(約40.5メートル)、時速435マイル(約700キロ)に達する大津波が日本の内陸を襲いました。福島原発施設にある3つの原子炉も、津波によりメルトダウンが発生しました。災害発生直後、米軍は人道支援と災害救援活動に取り組む「トモダチ作戦」を実行しました。

米軍も自衛隊もいずれも経験したことのない未曾有の大災害に対して、「友人」を意味する「トモダチ」を作戦名とする「トモダチ作戦」を開始、正に自衛隊と米軍による全力の活動となりました。

あの震災から10年後、現在、横須賀基地に前方展開しているロナルド・レーガンは、年間を通して、引き続き第7艦隊の責任区域内での運用を行い、定期的に日本に帰港しています。2011年、東日本の沿岸で発生した津波の記憶は、日米のパートナーシップの重要性を常に思い出させます。ロナルド・レーガンの乗員の何人かは、この人道支援が艦隊、地域、そして世界に与えた影響を覚えています。

ロナルド・レーガン副長マシュー・ベンティミア大佐は、2021年3月11日、艦船の放送システムを介して乗組員と一緒に黙祷を捧げました。

「10年前の今日、私たちはパートナーである日本との絆をより強化し、今日、キーン・ソード等を含む共同訓練や演習、新型コロナウイルスのパンデミックに共に立ち向かい、その絆はさらに強化し続けています。私たちの友情は揺るぎないものであり、インド太平洋地域での運用を進める中、ロナルド・レーガンは誇りを持って同盟国である日本と共に任務に従事し続けます」とベンティミア大佐。

現在ロナルド・レーガンに乗艦する多くの乗組員が、当時「トモダチ作戦」に参加しています。その一人、ジュリエット・エランゴス上等兵曹は当時、強襲揚陸艦エセックスに乗艦し、同艦で艦隊医療班の一員として勤務しており、当時のチームの活動について振り返りました。

「2011年、凄まじい地震と津波が日本の北東部の海岸を襲った時、

私たちは『トモダチ作戦』に参加しました」とエランゴス上等兵曹。「甚大な自然災害が発生した後、地域のパートナーである日本の一助となる機会でした。震災により多くが破壊され被害は壊滅的なものでした」

作戦には、陸軍、海軍、空軍、海兵隊を含むアメリカ軍の全組織から24,000名以上の隊員、189機の航空機、そして24隻の艦船が作戦に参加しました。ロナルド・レーガンは、自衛隊艦船への燃料補給や、陸上支援の提供を可能にするための米海兵隊員や自衛隊員の移送のほか、被災地に食料や水、衛生用品を提供するための活動において重要な役割を果たしました。さらに、ロナルド・レーガンの艦載機は、地震と津波により孤立状態にある人々の偵察任務をも実施しました。

当時、西太平洋分遣隊第1強襲艇隊に所属し、陸上支援を提供したラウル・シムズ上等兵曹は、当時の活動について振り返りました。

「私の部隊は、エセックス揚陸即応群と自衛隊と共同で活動を行いました。汎用揚陸艇を利用して、電力を回復するために大島まで機材や物資を搬送しました」とシムズ上等兵曹。「これから日本の皆さんに寄せられる難題を直接目にして、どんな形でも支援したいという気持ちが沸き上がりました。そこには、今日でも存在する仲間意識と友情がありました」

第7艦隊は、航空任務を160回実施し、260トン相当の救援物資を搬送し、八戸、宮古、気仙沼の港でのがれき撤去作業の陣頭指揮を執りました。がれき撤去作業を行い港を再開させることは、人道支援を提供するうえで極めた必要不可欠な作業でした。

東日本大震災によりもたらされた壊滅的な被害にもかかわらず、日米の絆は強固で揺るぎないものであり続けます。第5空母打撃群の旗艦である空母ロナルド・レーガンは、戦闘に即応した戦力を提供し、インド太平洋地域の同盟国とパートナー国の共通の海洋権益を保護、防衛します。艦とその乗組員は、海外任務の遂行のためだけでなく、長年にわたるパートナーシップをより強化するためにもプレゼンスの重要性を実証し続けます。

第72任務部隊「シードラゴン」2021を完了



在日米海軍司令官

在日米海軍日本管区司令官

ブライアン・フォート少将

こんにちは、CNFJです！

2021年が始まって早くも半年を迎えようとしており、新型コロナウイルスとの世界規模での闘いが一年以上続いているのは本当に信じがたいことです！

コロナ禍により人と人との交流が制限され困難な状況が続く中、米海軍チームはこの環境に順応する素晴らしい能力を発揮し、任務に従事できるよう革新的な方法を検討しています。2020年はウイルスからの防御に徹することしかできませんでしたが、2021年の初頭に新型コロナウイルスのワクチンが到着し、ようやくウイルスに対する攻撃に切り替える機会が与えられました。日本における米海軍施設は、安全な予防接種の投与を続けています。投与されたワクチン数において、在日米海軍は米海軍全体の先頭に立っています。人々の健康を最優先に、感染拡大の軽減に努めることで、米海軍前方展開部隊とその家族の即応性を維持することができ、私は本当に誇りに思っています。コロナ禍との闘いはまだ終息していませんが、ようやく近い将来、日常生活に戻る兆しが見え始めています。

艦隊においては、今年の2月、第7艦隊の新たな一員として誘導ミサイル駆逐艦ラファエル・ペラルタを横須賀に迎えることができました。米海軍が最も能力の優れた最新鋭の艦船の西太平洋への配備を継続する中、私たちはラファエル・ペラルタの今後の活躍に期待しています。今後インド太平洋で実施される演習や訓練を通して、海上自衛隊やその他の同盟国と培われる新たな関係構築のほか、ラファエル・ペラルタの乗組員たちが地元横須賀で新たな友情を築いてくれることを楽しみにしています。私たちはいつまでも絶えずこの重要な地域の平和、安全と安定を維持することに専心しています。3月現在、すでに日米は共に多国籍演習に5度参加しています。米海軍と海上自衛隊の間で築き上げてきた関係は、どのような障害をも越えて共に進んでいきます。

米海軍と海上自衛隊は引き続き相互運用性の向上に努めています。誘導ミサイル駆逐艦バリーと海上自衛隊補給艦「とわだ」が夜間の海上補給を行ったほか、日本の南東沖では、2月、機雷戦闘訓練「1JA 2021」等を実施しました。このような統合訓練は、不測の事態に備える上で有益であるばかりでなく、米海軍兵と海上自衛隊員との絆をも深めることができます。3月11日は、東日本に大きな被害を与えた東日本大震災の10周年を振り返り、震災で愛する人や多くのものを失い、その影響を今でも感じている人々に想いを馳せ、震災を振り返りました。

最後になりますが、私は在日米海軍で働くすべての諸君の活躍を大変誇りに思っており、また私たちを受け入れて下さっていること日本で、彼らと共に任務に就いていることを大変栄誉なことであると感謝しています。



グレン・スラウター一等兵曹 第72任務部隊

米海軍ならびにその海洋パートナー国は、グアム島周辺海域で固定翼哨戒機多国間共同訓練「シードラゴン2021」を実施、1月27日訓練は成功裏に完了しました。約2週間にわたり5カ国から190人以上の要員が250時間以上に及ぶ地上訓練や研修などを行い、米海軍の潜水艦を追跡する高度な訓練が行われました。

青森県米海軍三沢航空施設を拠点とする第72任務部隊は、第5哨戒飛行隊、第8哨戒飛行隊所属の海上哨戒偵察機P-8Aポセイドン2機を派遣し、オーストラリア空軍、海上自衛隊、インド海軍、カナダ空軍と共に、年次対潜戦訓練を実施しました。

今年で3回目を迎えた本訓練の目標は2つあり、高度な対潜戦技量の実証、そして米国の同盟国やパートナー国との多国間の参加を図り、太平洋地域の安全保障への責務を継続的に構築することです。

第5哨戒飛行隊リード・アルス大尉は、訓練での他国との競争のほか、他国の航空団から知識を得る機会に心を躍らせていました。

「第5哨戒飛行隊は、訓練期間中に対潜戦の実力を披露することができると機会を待ちにし、同盟国やパートナー国との友好的な競争を楽しみにしていました」とアルス大尉。

「航空団同志の戦術を比較することで多くのことを学び、自らの戦闘能力を常に向上させる能力も学びました。訓練を終えてグアム島を去る時には、最高の技量に達した状態で参加者全員が世界のありとあらゆる潜水脅威に対処できるようになっていることを願っています」

訓練の終盤では、ロサンゼルス級

潜水艦プロビデンスを捜索目標として追跡訓練を行い、参加各国の能力の向上を図りました。

本訓練について、第8哨戒飛行隊パイロット、ジョセフ・モラレスバルガス大尉は、対潜戦に関する難易度の高い一連の技術的な作業についての見解を共有できる独特な訓練であると述べました。

「他国の航空要員と連携して任務に就く機会是非常に貴重で、各参加国の対潜戦に対する指針や見識を知ることができて、とても有益な訓練になりました」とモラレスバルガス大尉。

各国が競い合う訓練では、各チームが個別に採点され、最高点を獲得したカナダ空軍407飛行隊チームに「最高得点賞：ドラゴンベルト」が授与されました。

カナダ、インド、日本、オーストラリアとアメリカは、共通の価値観と航海の自由の伝統を共有する海洋パートナーです。「シードラゴン2021」のような訓練は、多国間との関係と海洋における安全保障を強化するために極めて重要です。

米海軍最大の前方展開艦隊である第7艦隊は、西太平洋とインド洋全域に50隻から70隻の艦船と潜水艦を擁しています。アメリカ第7艦隊は自由で開かれたインド太平洋地域を維持し守るための任務を遂行する一方、35か国の海洋国と日常的に運用や交流を行っています。

空母ロナルド・レーガン乗員 2回目の新型コロナウイルスワクチン接種開始



キャメロン・エディ2等兵曹 空母ロナルド・レーガン

横須賀に前方展開されている米海軍唯一の空母ロナルド・レーガンは、2月2日、乗員に対する2回目の新型コロナウイルスの接種を横須賀基地で開始しました。

ロナルド・レーガンの乗員は、1月7日に投与が開始された1回目の接種に続き、今回2回目となる接種を受けました。ワクチンは納品される都度、速やかに海軍兵に提供されており、数カ月以内に段階的に納品される予定です。

ロナルド・レーガンのワクチン供給を担当する同艦上で勤務する看護師ジョー・ヴァハリ大尉は、艦の乗組員全員の予防接種を完了させることは重要な節目であると強調しました。

「他の一連のワクチン同様、1回の接種ではウイルスに対する免疫は最大80%にしか達しません」とヴァハリ大尉。「2回目の接種をすることでブースター効果により、ウイルスに対する免疫は95%に上がります。ワクチンは、自分の体にウイルスと戦う術を与え、2回目の接種はその戦う力を強化します」

2回目の接種で生じうる副作用は、1回目の接種に比べより激しい場合もあり、倦怠感、発熱、接種部位に腫れなどの症状が出る場合があります。副作用が新型コロナウイルスの症状に似ているため、ロナルド・レーガンの医療チームにとって兵站面での障害が生じます。

「1回目の接種を受けた人の55

%と比較して、2回目の接種では約80%の人に、新型コロナウイルスのような症状が出ることを推定しています」とヴァハリ大尉。「ワクチン反応は、新型コロナウイルスの症状を反映しているため、「インフルエンザの様な症状反応」をワクチン接種によって経験するかもしれません。こうした医療対応をできるだけ軽減するため、症状が出ている人と遠隔で話し、ワクチンを接種したときの経緯を問い、症状が通常のインフルエンザや風邪と異なっているか、症状が48時間以上続いているかなどを確認します」

2月3日、2回目の接種を受けたマシュー・ロレン上等水兵は、ワクチン接種を2回受ける重要性を以下のように語っています。

「2回目の接種を受けることができ嬉しいです。ここまでの進歩の結果を確認して、自分たちの生活がこれからどのように変わっていくのか確かめたいです。個人的な話ですが、故郷にいる人々が新型コロナウイルスで亡くなりました。ある家族はウイルスに感染し、その後様々な問題(後遺症など)に苦しんでいます。私は若くて健康かもしれませんが、祖父母や叔父に感染させてしまう可能性もあるので、これは私自身の責任です。ですからすべての人に接種をお勧めします」

フランシスコ・パレラ上等兵曹も2月3日に2回目の接種を受け、ワクチン接種の重要性と新型コロナウ

イルスが彼にどのように影響したかを説明しました。

「私は『(ウイルスの恐ろしさは)自分が感染するまで本当にわからない』と人々に言っています」とパレラ上等兵曹。「自分が感染するまで恐ろしさを感じることはないでしょう。数ヶ月前に私の叔父が新型コロナウイルスで亡くなった時に、私は恐ろしさを実感しました。ワクチン接種の影響はすぐにはわからないかもしれませんが、科学者をはじめこのワクチンを開発するために人生を捧げてきたすべての人々を信頼する必要があります。私たちは毎日生活し、任務に従事し、歴史を作っています。そして今、ここにいるすべての人が(接種をすることで)歴史を作っているのです」

ロナルド・レーガンによる予防接種の取り組みは、米海軍横須賀基地の横須賀を拠点とするすべての艦船にも及んでおり、他の艦船や乗組員もロナルド・レーガンの医療チームから接種を受けています。

「私たちは空母だけではなく、横須賀を拠点とするすべての艦船の乗組員に積極的に予防接種の投与を行ってきました」とヴァハリ大尉。「私たちはいくつかの『バブル艦』と呼ばれている、現在は運用目的のために新型コロナウイルスの陽性件数がない艦の乗組員へもワクチンを接種してきました。これは、防護服、N-95 マスクとフェイスガードを着用して待つロナルド・

レーガンに『バブル艦』の乗員が来てワクチン接種を受け、新型コロナウイルスの感染が無い状態で『バブル艦』に戻る、ということです」

乗組員はワクチン接種を受けていますが、ワクチンによる長期的な効果が証明されるまで、マスクの着用とソーシャルディスタンスの確保は引き続き必要となります。世界ならびに国内の公衆衛生当局は、新型コロナウイルスのリスクが大幅に減少するまで、すべての人々に引き続きマスクの着用とソーシャルディスタンスの確保を推奨する見込みです。

乗組員はワクチン接種を受けていますが、医療に携わる一員として乗組員の大多数にワクチンを接種したと言えるのは素晴らしいことです」とヴァハリ大尉。「この艦には私の故郷よりも多くの人があります。これを数週間成し遂げたことは、非常に素晴らしいことです」

第5空母打撃群の旗艦である空母ロナルド・レーガンは、戦闘に即応した戦力を提供し、インド太平洋地域の同盟国とパートナー国の共通の海上利益を保護、防衛します。ロナルド・レーガンは第7艦隊の責任地域内への6カ月にわたる展開を経て、2020年11月、横須賀に帰港しました。





米海話:

「Geedunk」 (ギーダंक)

米海軍兵にとって「ギーダंक」はアイスクリームやキャンディー、ポテトチップスのようなスナック菓子、またはこれらの菓子類を購入する店舗を意味する単語ですが、実はこの単語の正確な語源については誰も知りません。語源については諸説ありますが、ドイツ語の「tunk」が由来となっている可能性があるとする説があります。tunkには浸すという意味があり、昔は焼き立てのパンを入手することが困難であり、その時代の人々は古くなったパンをグレイビー・ソースやコーヒーなどに浸して柔らかくして食べるのが常でした。「ge」は、繰り返しを示すドイツ語のアクセントのない接頭辞です。パンを浸すことを繰り返し行っていた習慣を表す「getunk」という単語がやがて時を経て「geedunk」に変わったかもしれません。そのほかに「ギーダंक」という単語は、自動販売機がソフトドリンクをカップに注ぐ時の音であると言う人もいます。しかしながら単語の語源が何であれ、米海軍の将兵たちがこの単語を好んで使っている事実は変わりません。

NICE TO MEET 友

ブランドン・ペリー2等兵曹
第72任務部隊 第8哨戒飛行隊 訓練科



あなたのお仕事について少しお話を聞かせていただけますか？

現職は第8哨戒飛行隊 (VP-8) の訓練科に所属しています。私は対潜戦運用者として、水上艦ならびに潜水艦の探知、分析、識別、追跡などの運用・戦術任務を世界中で支援する航空要員に情報資料を作成しています。これらの内容により、第8哨戒飛行隊は第7艦隊のより正確かつ詳細な戦術像の構築を可能にし、(米海軍の) 総体的な任務に寄与します。

仕事上でのご自身の役割は新型コロナウイルスでどのような影響を受けましたか？

新型コロナウイルスによって、出勤を長期間禁止する移動制限指針 (ROM) の影響で実際の飛行時間が少なくなり、情報収集、警戒監視や偵察活動を提供することが世界中で難しくなっています。

日本にはどれくらいお住まいですか？

来日してから5カ月経ちました。

日本での生活で何がお気に入りですか？

日本に勤務することで習った日本語を (母国語である地元の方々と話して) 練習ができ、日本の文化を体験できることが良いです。

日本の食べ物では何がお好きですか？

日本の食べ物の中で寿司が一番好きです。

日本で今まで訪ねた中で一番好きな場所はどこですか？

京都が一番お気に入り場所です。京都にある城を観光しに行く度、江戸時代の日本を訪れたような経験ができます。

コロナ禍が終息した後、一番したいことは何ですか？

(日本各地の) 都道府県を家族と一緒に観光することです。



アセット紹介: P-8Aポセイドン



Photo by サミュエル・ウェルデン3等兵曹

全長: 129.5 フィート (39.47m)

高さ: 42.1 フィート (12.83m)

翼幅: 123.6 フィート (37.64m)

重量: 189,200 ポンド (85,820 kg)

乗員: 9人 (操縦室2人、ミッションクルー5人、補助パイロット1人、機内整備士1人)



海軍のP-3Cの後継機であるP-8Aポセイドンは、海軍の海上哨戒および偵察部隊が人員配置、訓練、運用、配備を行う方法を変革しつつ、長距離海上哨戒能力における海軍の未来を確かなものにするべく設計されています。P-8Aは、従来の有人部隊と進化する無人センサーとの世界的な即応性と相互運用性の部隊と簡素化されたインフラ

で、より多くの戦闘能力を提供することが可能です。P-8は正に多目的の海上哨戒機であり、対潜戦、対艦戦、情報収集、監視、偵察ならびに搜索救助などの任務に優れています。P-8はより高度の飛行が可能で (最大41,000フィート、より迅速な戦闘対処が可能です (490ノット))。P-8は低空高度の任務にも対応できるように設計されており、人道支援や搜索救助の

任務を支援する能力は既に実証されています。第72任務部隊 (CTF-72) は、第7艦隊を支援するために哨戒、偵察、監視部隊を率いこの任務の遂行において同盟国と友好国、その他米軍組織との緊密な相互運用性を図っています。



在日米海軍 NOW!

[スタッフ]

在日米海軍司令官・在日米海軍日本管区司令官
ブライアン・フォート少将

在日米海軍司令部 広報部長
キャサリン・セリーゾ中佐

編集長
ニコラス・ドンリー

レイアウト・デザイン
アシュリー・エストレラ2等兵曹

在日米海軍司令部 広報・報道部
エイダン・キャンベル1等兵曹
マシュー・ブラッドリー上等兵曹

ご質問等はCNFJPAO@fe.navy.milにご連絡下さい。当ニュースレターの編集内容は在日米海軍司令部・在日米海軍日本管区広報部で編集され、承認されたものです。当ニュースレターは、必ずしも米政府、米国防総省、もしくは米軍の公式の見解を反映するものではありません。



@CNFJ



@CNFJPAO